様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：２６４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７８０３１４

研究課題名（和文）中山間地域で暮らす高齢者の医療に関連する福祉ニーズの評価指標の開発

研究課題名（英文）Development of evaluation indicators for medical and social welfare needs of older residents in hilly and mountainous areas

研究代表者
鈴木　裕介（Suzuki, Yusuke）

高知県立大学・社会福祉学部・助教

研究者番号：２０６１２００５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　研究の目的は、中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズの構造を明らかにして、その関連要因を検討することである。要介護高齢者12名、専門職12名に面接調査を行い、この結果から質問票を作成した。次に、中山間地域で暮らす要介護高齢者に対して、この質問票を用いた量的調査を行い、196名から回答を得た。
　因子分析の結果、医療福祉ニーズについて「役割変化」、「住環境」、「療養生活費」、「情報アクセス」、「社会資源量の不足」の5因子が抽出された。さらに、この5因子を独立変数、生活満足度尺度ｋを従属変数として重回帰分析を行った。その結果、「役割変化」「住環境」「療養生活費」が生活満足度と関連を示した。

研究成果の概要（英文）：　The present study aimed to elucidate the structure of medical and social welfare needs of older requiring care who resident in hilly and mountainous areas, and to investigate related factors. An interview survey conducted with 12 older and 12 specialists providing community-based support.
　Questionnaire was conducted on older, and responses were obtained from 196 individuals. Based on the results of factor analysis, the following five factors were identified as the medical and social welfare needs of elderly requiring care who resident in hilly and mountainous areas: “changes in roles”; “living environment”; “costs of recuperation”; “information access”; and “lack of social resources”. Multiple regression analysis was performed using “medical and social welfare needs” as the independent variable and the LSIK as the dependent variable. The results showed that “changes in roles”; “living environment”; and “costs of recuperation” related to life satisfaction.

研究分野：医療福祉

キーワード：中山間地域　高齢者　医療福祉　ニーズ　生活満足度

１．研究開始当初の背景

近年、在宅医療を促進する保健医療政策により、慢性疾患を抱えて在宅生活を送る高齢者が増加したことを背景として、疾患を抱えながら地域で暮らす高齢者に対する支援が重要となった。厚生労働省老健局長の私的研究会が取りまとめた報告書「2015 年の高齢者介護」は、「『高齢者が尊厳をもって暮らすこと』を確保することが最も重要であり、高齢者が介護が必要となってもその人らしい生活を自分の意思で送ることを可能とすること、すなわち『高齢者の尊厳を支えるケア』の実現」を課題として挙げている。高齢者の尊厳を支えるケアを実現するための具体的方策として地域包括ケアシステムの構築について提唱し、保健・医療・福祉の継続的・包括的支援の必要性について言及している。なかでも、中山間地域は、「人の空洞化、土地の空洞化、むらの空洞化」（小田切 2009）が進んでおり、早急に支援システムの構築が求められる。しかし、中山間地域の医療福祉ニーズの研究はわずかに散見されるのみであり、充分に明らかになっているとは言い難い。

２．研究の目的

中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズの評価指標を開発して、その関連要因について検討することとした。

３．研究の方法

（1）中山間地域で暮らす要介護高齢者 12 名に対して個別インタビューによる半構造化面接を行った。分析方法は、Mayring（2004）の質的内容分析を参照して行った。具体的には、同じ意味の言い換えや、まとめをする要約的内容分析、分析単位を理論的背景や発言の文脈を基盤に説明的な言い換えをする説明的内容分析、これまでに明らかになっている構造に添ってデータの抽出をする構造化内容分析を組み合わせて分析を行った。分析結果は、テクストの最小であるものを「コード化単位」、「コード化単位」をいくつか組み合わせた「文脈単位」、もっとも大きな概念は、「カテゴリー」また、語りの内容は「分析単位」として生成、抽出した。

（2）中山間地域に暮らす高齢者を対象に支援を行っている専門職 12 名に対して個別インタビューによる半構造化面接を行った。分析方法は、(1) と同様である。

（3）中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズ尺度を開発するために、質問項目について、要介護高齢者 12 名及び支援者 12 名に対するインタビュー結果で生成した概念と既存の尺度（古谷野ら 1987；森本ら 2001；小澤ら 2004）を参照して 6 領域 31 項目を仮説モデルとして質問項目を作成した。次に、この質問票を用いた個別面接調査を行った。得られた質問票 196 票に対して因子分析（プロマックス回転を伴う主因子法）を行った。因子負荷量が低い項目についてその意味と内容を考慮しつつ検討し、0.40 以下の項目を削除した。

（4）「中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズ」の各因子及び統制変数である年齢、性別、家族形態、ADL を独立変数に、LSIK を従属変数として強制投入法による重回帰分析を行った。

４．研究成果

（1）中山間地域で暮らす要介護高齢者 12 名に対する個別インタビューの結果

中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズとして生成されたコード化単位は、25 項目だった。また、カテゴリーを分類した結果、11 の文脈単位、5 のカテゴリーを抽出した。カテゴリーは、【】、文脈単位は、《》、コード化単位は、〔〕で表記する。5 つのカテゴリーは、【療養生活費負担に関連する困りごと】、【受診・受療に関連する困りごと】、【役割変化に関連する困りごと】、【住環境に関連する困りごと】、【社会資源に関連する困りごと】であった。

これらの困りごとは、中山間地域の地理的特性に大きく影響を受けていることが見いだせた。すなわち、居住地区の地理的条件によって生じる、人、場所、社会資源に対するアクセス困難のことであり、《周辺環境のバリア》を中心として生じている。自宅前から一番近くの道路にでるまでも距離があり、自家用車やタクシーを使うとしても大変である。さらに、自家用車がない場合はタクシーを利用することとなり、役所から配布されているタクシー券を利用しても経済的に厳しい。ある程度 ADL が自立している場合は、バスの利用も検討するが、自宅からバス停までの距離や坂によって利用困難な状況になりやすい。このように、中山間地域で暮らすことは、どこに移動するにも体力的、金銭的、交通整備状況の未整備から厳しい。この《周辺環境のバリア》が《専門医の受診困難》に影響を与えていると考えられる。

（2）中山間地域に暮らす高齢者を対象に支援を行っている専門職 12 名に対する個別インタビューの結果

中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズとして生成されたコード化単位は、48 項目だった。また、カテゴリーを分類した結果、18 の文脈単位、6 のカテゴリーを抽出した。カテゴリーは、【】、文脈単位は、《》、コード化単位は、〔〕で表記する。

6 つのカテゴリーは、【医療費負担に関連する困りごと】、【受診・受療に関連する困りごと】、【役割変化に関連する困りごと】、【住環境に関連する困りごと】、【情報理解に関連する困りごと】、【社会資源に関連する困りご

と】であった。これらの困りごとに共通している特徴は、居住地区の地理的条件や人間関係によって生じる、場所、人、社会資源に対する「アクセシビリティ困難」である。これらの特徴を踏まえながらカテゴリー同士の関連について考察する。中山間地域で暮らすことは、《周辺環境のバリア》として場所へのアクセシビリティ困難があり、どこに移動するにも体力的、金銭的、交通整備状況的に厳しい。《移動費の支払い困難》と《専門医の受診困難》が相互に影響して、受診抑制につながると考えられる。受診抑制から未受診になると病状が悪化し、定期受診費より高額な入院費治療が必要な状態となり《医療費の支払い困難》となる。このように経済的困窮になった際、本来であれば、行政等の公的機関や NPO などの相談機関に相談することが望ましいだろう。しかし、中山間地域における人間関係の特徴が、相談することへの抵抗感を生じさせていると考えられる。一般的に中山間地域の人間関係は、豊かである状況と捉えられている（金澤 2005; 太湯ら 2006）。

一方、この緊密な人間関係は、支援専門職と、支援を受ける利用者の関係性の前に、同地域で暮らす地域住民同士という 2 つのコンテクストが混在することになり、一般的に語られる支援者と援助者間の関係とは様相が異なる。【医療費負担に関連する困りごと】のような家庭状況に深くかかわることは、この 2 つのコンテクストによって「近所の人に知られたくない」、「福祉の世話になるのは恥ずかしい」といった抵抗感が増幅し、人、社会資源へのアクセシビリティ困難となることが考えられる。また、未受診の状態は、病状の悪化を招き、《社会的役割の変化》、《余暇活動の変化》、《家族関係の変化》を引き起こすと考えられる。これらの変化は、孤立の原因となり、《介護保険制度理解の困難》、《医療制度理解の困難》、《市町村独自制度理解の困難》等、社会資源の情報へのアクセスを困難にさせる。また、病状が重いほど、療養生活に《社会資源の不足》が影響を与えて、療養生活継続を困難にさせていると考えられる。さらに、《社会的役割の変化》、《余暇活動の変化》の状況は、本人と周囲の人の考え方が大きく異なる。周囲の人は、緊密な人間関係を背景に変わらない付き合いをしようと試みるが、本人にとっては、その緊密な人間関係がつらく、関わることを迷惑として捉えて生じる困りごとであると考えられる。

（3）「中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズ」の因子構造

第一因子は、「病気になる前にくらべて、家庭内の役割が少なくなったと感じている」、「病気になる前にくらべて、家族に迷惑をかけていると感じている」、「病気になる前にくらべて、近隣・友人の相談にのることができなくなったと感じている」、「病気になる前にくらべて、近隣・友人に迷惑をかけていると感じている」、「病気になる前にくらべて、自分の趣味や生きがいがなくなったと感じている」、「病気になる前にくらべて、地域内での役割が果たせなくなったと感じている」の 6 項目で構成され、【役割変化に関する困りごと】と命名した。第 2 因子は、「病気になる前とくらべて、移動するとき室内の段差が危なくなったと感じている」、「病気になる前とくらべて、移動するとき家の周りの段差が危なくなったと感じている」、「病気になる前とくらべて、家の周りの移動が不便になったと感じている」、「病気になる前とくらべて、暮らしやすくするための住宅改修が必要だと感じている」の 4 項目で構成され、【住環境に関する困りごと】と命名した。第 3 因子は、「医療費の支払いは苦しいと感じている」、「介護保険利用料の支払いは苦しいと感じている」、「病院に行くための交通費の支払いは苦しいと感じている」、「健康維持に必要なものに対する費用の支払いは苦しいと感じている」の 4 項目で構成され、【療養生活費に関する困りごと】と命名した。第 4 因子は、「地域の病院に関する情報が手に入りにくいと感じている」、「医療費助成に関する情報が手に入りにくいと感じている」、「地域の福祉施設に関する情報が手に入りにくいと感じている」、「介護保険に関する情報が手に入りにくいと感じている」の 4 項目で構成され、【情報アクセスに関する困りごと】と命名した。第 5 因子は、「この地域では、高度な医療を受けることできず困っていると感じている」、「介護保険サービスは不足していると感じている」、「専門的な医療を受けるための医療機関は遠くて受診が大変だと感じている」、「地域の福祉施設が不足していると感じている」の 4 項目で構成され、【社会資源量の不足に関する困りごと】と命名した。また、各因の内的整合性を確認したところ、Cronbach のα信頼係数は第 1 因子.842、第 2 因子.913、第 3 因子.809、第 4 因子.775、第 5 因子.679 であり、第 5 因子がやや低いものの、信頼性が確認された。

因子間の相関では、【住環境に関する困りごと】と【情報アクセスに関する困りごと】以外の因子間で弱から中程度の正の相関がみられた（r = .218～.564）。最も高い正の相関がみられたのは、【住環境に関する困りごと】と【役割変化に関する困りごと】であった（r = .564）。要介護高齢者が中山間地域で暮らすことは、どこに移動するにも体力的、交通整備状況的に厳しい。これまで、地域での活動や趣味を通して築かれた交流関係は、このような地理的条件が活動への参加や交流を阻害する要因となり、本人の役割が変化すると考えられる。また、【社会資源量の不足に関する困りごと】はすべての因子と中程度の正の相関関係がみられた（r = .363～.443）。先行研究や本研究でも実証されたように中山間地域において社会資源は不足しており、社会資源を拡充することは、中山

間地域で安心した療養生活を送るうえで重要であることが相関関係からも示されたと考えられる。

（4）重回帰分析の結果を表 1 に示す。生活満足度に対して「役割変化に関する困りごと」（β＝.375）は、0.1%水準で有意な関連を示した。「住環境に関する困りごと」（β＝.222）は、1%水準で有意な関連を示した。「療養生活費に関する困りごと」（β＝.156）は、5%水準で有意な関連を示した。「情報アクセスに関する困りごと」及び「社会資源量の不足に関する困りごと」は有意な関連は示されなかった。また、重回帰モデルの F 値は、0.1%水準で有意であったため、これらの重回帰モデルは有効であることが示された。

表 1「中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズ」と生活満足度尺度の関連

	β	t 値	
役割変化に関する困りごと	-.375	-4.490	***
住環境に関する困りごと	-.222	-2.628	**
療養生活費に関する困りごと	-.156	-2.187	*
情報アクセスに関する困りごと	-.028	-.393	
社会資源量の不足に関する困りごと	-.048	-.625	
年齢	.059	.893	
性別（0：女性、1：男性）	.106	1.587	
同居家族（0：なし、あり：1）	.096	1.427	
ADL 合計	-.030	-.451	
調整済 R^2	.367***		

*P<.05、**P<.01、***P<.001

生活満足度に最も影響を及ぼしていたのが「役割変化に関する困りごと」である。「役割変化に関する困りごと」は、社会的役割、余暇活動、家族関係に関する項目で構成されており、罹患してこれまで担っていた役割を果たせなくなることによって、生活満足度が低下することが示唆されたと言える。老年期の役割変化について、髙山（2011）は、新しい友人の作り方、余暇活動を促し、高齢者の尊厳を保つような社会的環境作りが必要と指摘している。さらに罹患することについて徳富（2007）は、罹患することによって役割を担うことが困難になったとき、役割の転換や人間関係の調整などの支援の必要性について指摘している。このように老年期は様々な役割変化が起こることに加えて、罹患することはこの役割変化に拍車をかけると考えられる。このような変化は、要介護高齢者が望ましくないものと捉えているため、生活満足度が低下すると考えられる。平均 84 歳である男女 12 名の要介護高齢者にインタビューした調査において、役割変化について「気を遣うと、なんぼ親子でもね、ちょっと気を遣うときがありますね」、「老人クラブもそうじゃけんどもう迷惑かけたらいかんき、俺は行かんね」（鈴木 2016）と語っている。本研究の結果は、この先行研究を跡付けるものであり、これらの結果から要介護高齢者は周囲に遠慮をしていると推察できる。そのため役割変化に対する支援をする際は、丁寧に本人の意向を把握し、「～はしたくない」、「～には参加したくない」という意見があっても時間をかけて潜在的ニーズの把握をすることが重要だと考える。

生活満足度と 2 番目に影響を及ぼしていたのが「住環境に関する困りごと」である。「住環境に関する困りごと」は、住宅内でのバリア、居住環境周辺のバリア、また移動の不便さを表す項目で構成されており、罹患して行動範囲が制限されることによって、生活満足度が低下することが示唆されたと言える。小澤ら（2004）は、住居の安全性や利便性と主観的 QOL には相関性があると言及している。本研究において検証した結果、生活満足度とは負の関連があることが示唆され、先行研究を支持する結果が示された。高知県産業振興推進部中山間地域対策課（2012）の調査によると「住環境に関する困りごと」がある一方で、今後も住み続けたいと希望している方は、76.7%、地域に対する愛着や誇りを持っている方は、93.0%と非常に多くの方が継続して現在の居住地で暮らすことを希望している。この結果から転居ではない方法で住環境の暮らしやすさを考える支援が必要と考える。特に中山間地域では、要介護高齢者にとってバリアフルな住宅が多く（鈴木 2015；鈴木 2016）、現行の介護保険サービスのみでは十分な改修は難しいと考える。

生活満足度と 3 番目に影響を及ぼしていたのが、「療養生活費に関する困りごと」である。「療養生活費に関する困りごと」は、医療費、介護保険利用料、受診に必要な交通費等を表す項目で構成されており、療養生活に必要な費用を負担することによって、生活満足度が低下することが示唆されたと言える。特に、受診時にかかる移動の費用は要介護高齢者にとって都市部では少ない中山間地域特有の大きな費用負担である。移動の費用負担について要介護高齢者は、「（ハイヤー代が）1 万円余りいりますがね。もう仕方ないきね」と語っており、さらに「あんまり贅沢はできませんねえ。まあ、食べるのを遠慮する。あんまりようけ食べんからねえ」（鈴木 2016）と療養生活費が他の生活費に影響を与えていると推察できる。医療費助成制度のみでは「療養生活費に関する困りごと」に対応することは不十分であり、特に往診体制が脆弱な中山間地域においては、通院費も含めた支援をすることにより生活満足度が向上す

ると考える。

生活満足度と「情報アクセスに関する困りごと」及び「社会資源量の不足に関する困りごと」は、有意な関連を示さなかった。これら3つの因子を表す得点は、他の困りごとと比較すると、直接「苦しい」、「つらい」等、感じにくい困りごとであることが影響していると考えられる。「役割変化に関する困りごと」、「住環境に関する困りごと」、「療養生活費に関する困りごと」の3つの因子を表す得点は、罹患を起因とした心身の変化によって、直接、ライフスタイルや家計状況が変化すると推察される。一方「情報アクセスに関する困りごと」と「社会資源量の不足に関する困りごと」の2つの因子を表す得点は、高齢者が元気な時は関係なく、要介護高齢者となって初めて必要となる。不足して困っていると感じても充足した社会資源の情報やサービスの提供を体感していないので、他の3つの因子を表す得点と比較すると充足から不充足への変化が乏しい。この変化の乏しさが以前の生活とのギャップを生み出さず、生活満足度との関連を示さなかったと考えられる。これまでの先行研究から情報アクセスや社会資源量に関する困りごとが存在することは明らかである（栗田2000；小磯2009；鈴木2015;鈴木2016;小林ら2000;大友2012）。しかし、生活満足度との関連がないことは、他の3つの因子を表す得点と比較して困りごとを捉えにくいと推察される。そのため専門職は支援をする際、この2つの因子を表す得点については、高齢者から訴えがなくても積極的に支援者から確認を行い、支援者が考えるアセスメントを高齢者と情報共有を図ることが重要と考える。

＜引用文献＞

①太湯好子・岡田ゆみ・神宝貴子・ほか、中山間地域における高齢者の健康寿命を支える地域保健福祉の基盤づくりに関する研究、川崎医療福祉学会誌、115(2)、2006、423-431
②小林江里香、杉澤秀博、深谷太郎・ほか、高齢者の保健福祉サービスの認知への社会的ネットワークの役割―手段的日常生活動作能力による差異の検討、老年社会科学、22(3)、2000、357-366
③小磯明、地域と高齢者の医療福祉、御茶の水書房、2009
④古谷野亘・柴田博・中里克治・ほか、地域老人における活動能力の測定--老研式活動能力指標の開発、日本公衆衛生雑誌、34(3)、1987、109-114
⑤栗田明良、中山間地域の高齢者福祉―「農村型」システムの再構築をめぐって、(財)労働科学研究所出版、2000
⑥Mayring、P.、Qualitative Content Analysis、Flick、U.、Kardoff、E.V.、Steinke、I. eds. A Companion to Qualitative Research、Sage、2004 266-269
⑦森本美智子・高井研一・中嶋和夫、病気に関連した不安認知尺度の開発、岡山県立大学保健福祉学部紀要、8、2001、11-19
⑧小田切徳美、農山村再生 ―「限界集落」問題を超えて、岩波書店、2009
⑨小澤純一・桜井康宏、高齢者の生活機能・障害と居住環境の関連性に関する調査研究―住生活に着目した居住環境評価尺度の開発、日本建築学会計画系論文集、586、2004、25-30
⑩大友達也、広島県におけるヘルスリテラシーの現状と課題―都市部とへき地の住民調査、医療福祉研究、6、2012、31-48
⑪鈴木裕介、中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズに関する研究―地域を基盤として支援を行っている福祉専門職に対するインタビュー調査に基づいて、社会福祉学、56(3)、2015、58-73
⑫鈴木裕介、中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズに関する研究―要介護高齢者に対するインタビュー調査に基づいて、医療社会福祉研究、25、2016、27-42
⑬髙山巖、老年期の生活と医療福祉の課題、星野正明・高内克明・土田耕司編、医療福祉学の道標、2011、65-67、金芳堂
⑭徳富和恵、医療福祉の援助を抱えた人びと、児島美都子・成瀬美治編、現代医療福祉概論第2版、2007、120-143、学文社

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①鈴木裕介、中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズと生活満足度の関連、介護福祉学、2017、査読有、（掲載予定）
②鈴木裕介、中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズの現状、高知県立大学紀要社会福祉学部編、査読有、66、2017、27-35
③鈴木裕介、中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズに関する研究―要介護高齢者に対するインタビュー調査に基づいて、医療社会福祉研究、査読有、25、2016、27-42
④鈴木裕介、中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズに関する研究―地域を基盤として支援を行っている福祉専門職に対するインタビュー調査に基づいて、社会福祉学、査読有、56(3)、2015、 58-73
⑤鈴木裕介、中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズの構造、介護福祉学、査読有、22(2)、2015、103-113

〔学会発表〕（計１件）

①鈴木裕介（2014）「中山間地域で暮らす高齢者の医療福祉ニーズの構成要素」第24回日本医療社会福祉学会

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木　裕介（SUZUKI, Yusuke）
高知県立大学・社会福祉学部・社会福祉学科・助教
研究者番号：20612005